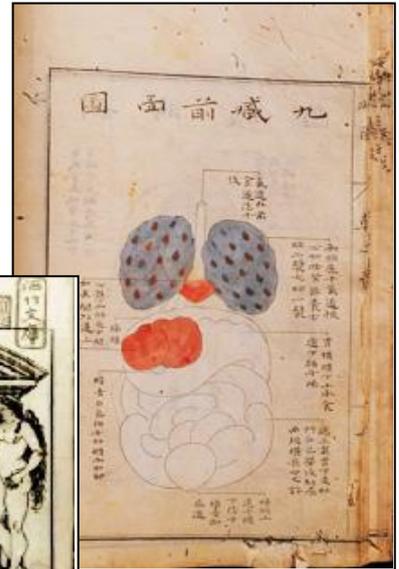


日本大学医学部史料室展示一覽



日本大学医学部史料室展示一覧

1 売薬宣伝の引札

人参大乘圓の宣伝，屋根のついた典型的な商店の店頭を描いている。当時，薬屋の看板は派手なことでも有名であり高価なものであったため，雨の日や夜になると扉を閉めた。

2 疱瘡絵（天然痘）（赤絵）

天然痘の鬼は赤い色を嫌うとされることから、患者も家族も赤い着物を身につけ、また赤絵（紅絵・疱瘡絵）といわれるものを家の中にはり、鬼の退散をねがう慣習も見られた。また、幼児のなぐさめやお見舞いなどにも用いられ、回復すると焼き捨てたり、川に流したりしたため、現存するものは少ない。

3 はしか絵 麻疹除神法 画：芳員

日本武尊が枕もとに現れ、麻疹よけの法を授けたという。南天（難を転じる）の木で作った杵（病を打ち砕く）を腰につけ、赤い猿のぬいぐるみを作れと言っている。日本武尊が左手に持っているのは、その猿のぬいぐるみである。麻疹が“去る”にかけているらしい。

4 麻疹退治 文久2年 画：芳藤

被害にあった職業を表わす風呂屋の桶屋が麻疹の神をこらしめている。麻疹神も顔や手足に発疹が描かれた酒吞童子として描かれることがある。そのほか麻疹神を多数の小悪霊として描かれたものや、人間の姿で描かれたものもあった。

5 錦絵 飲食養生鑑 江戸後期

飲食と五臓六腑の関係を説いた錦絵。体内の働きを擬人化して描いた、珍しい絵である。「貴人も下賤も賢も愚も、腹の中はこの如し」と、体内を解説している。胃は倉で、飲み食いの品を納めるところ。臍のあたりからは金が出るが、これを臍くりと言う等々。

6 養生訓 貝原篤信（益軒）（文化10年・1813年刊）

飲食、飲茶、煙草、洗浴等自身の実体験に基づいて書かれたもので、長寿を全うするための身体の養生だけでなく、こころの養生も説くというところに特徴がある。

7 票告 種痘宣伝 種痘普及のための“ちらし” 嘉永3年(1850) 画：山挙

嘉永2年(1849)、牛痘接種法が長崎で成功以来、全国に急速に普及していくが、翌3年、江戸の医師桑田玄斎(1811-1868)が種痘の効用を宣伝した錦絵を作る。これを大阪除痘館で利用したのがこの錦絵である。Vacca（牝牛）を白牛に見立てている。

8 児玉有成 牛の痘をよめる長歌 小鷹狩元凱に贈る

児玉有成(-1897) 広島県山県郡有田の人。大阪にでて医業を学ぶ。嘉永3年養父（涼庵）と共に種痘を行い普及に努める。明治11年医業を廃し、行吏となる。

9 Practica copiosa Caspar Stromayr 著

1559年に刊行された「カスパー・ストライマイヤーによる手術教訓」のラテン文字への転写本
寄贈者：日本大学名誉教授 F. W. ヘアライン博士

10 疱瘡神の図（模写）

中国の峨眉山に住む三姉妹の女神。疱瘡の流行を支配したといわれる。衣装が麻製のため麻娘と呼ばれた。

1 1 春日権現験記・疫鬼図（模写）

春日権現験記は全二十巻からなり，他に目録一卷を備える。神罰によって病気に苦しむ人の姿がいろいろ描かれている。その背景に当時の人々が病気をどのように見ていたかを示している。この疫鬼図は第八巻の一部である。門戸に魚の頭をさしているのは疫病神の進入を防ぐまじないの一種である。

1 2 Origin of the Vaccine Inoculation（種痘 2000 年 復刻版） Edward Jenner 著

当時，牛痘にかかると天然痘にはかからないという説が存在しており，ジェンナーはそれを実験によって証明した。これにより，牛痘による天然痘予防法（＝種痘）が確立された。その後，種痘は天然痘の広がりと共に世界中に普及し，この功績をたたえ，ジェンナーは「近代免疫学の父」と呼ばれた

1 3 野間三竹像（模写）

野間三竹（1608-1676）芸備の人。江戸時代前期の医者，儒学者

1 4 Clysmatica Nova 復刻版 Elsholtz, J. S. 著

1665 年発行のドイツ語版では世界で 2 冊のみが現存し，ラテン語版は松木明知教授（元弘前大学麻酔学教授）のみが所有。ラテン語版を復刻し，次にその英語訳を出版した。当時，薬物や液体を経静脈的に投与する概念はなく，静注や輸血を意味する言葉が無かったため浣腸を意味する Clysmatica という語を使用したと思われる。阿片を静脈注射して麻酔状態を作り出した点においては，麻酔科学または静注や輸血の歴史上の意義は大きい。

1 5 小野蘭山像 賛：小野職孝 画：立晟 文化 7 年（1810）3 月 25 日

京都本草界の中心人物。71 歳で江戸に上り，医官として本草を躋寿館で講じ幕命により各地の採薬調査を行った。

1 6 本草啓蒙名流 小野蘭山 鑑定 小野職考 編（文化 6 年（1809））

小野蘭山の主業績である「本草綱目啓蒙」について，職孝が，この中に入っている名称をイ・ロ・ハ順に整理しまとめたもので「本草綱目啓蒙」を理解する上で，手引きになるものである。

1 7 小野蘭山書 五絶 七十初度 寛政 10 年

小野蘭山（1729-1810）京都の人。本草学者，名は取博，字は以上，通称が蘭山，軸は蘭山の 70 歳の長寿を喜ぶ歌。

1 8 富士川游 和歌二首

富士川游（1865-1940）広島の人。広島県医学校を卒業。医学雑誌の編集者，医史学者，宗教家，児童心理学者，日本の医史学の基礎を固めた人。昭和 15 年 11 月 6 日歿 享年 75 歳。当館所蔵資料は富士川游氏の書画がその中核をなしている。

1 9 日講記聞 抱独英（ボードイン）口授（明治 3 年・（1870 年刊））

ボードインが大学東校（大坂医学校）で明治 3 年に約 3 ヶ月講義した時の講義録

2 0 吉益東洞（ヨシヤストウ）像 賛：藤原正兄

吉益東洞（1702-1773）広島の人。京都の漢方医，古方派の泰斗（タイトウ・権威者）吉益派の始祖。万病一読論（外邪襲い来るともその体内に毒がなければ発病しない。毒を去れば病は治る。薬も毒であるから，毒を以って毒を攻め，毒を去れば病は治る）で一世を風靡する。名は為則，字は公言，通が周助

- 2 1 薬徴 吉益東洞 (天明 5 年 (1785 年刊))
古方の薬品 5 3 種についての古典の記述と自己の経験とを勘案して、新しい薬方の類別を示した著作、古方派医学の古典となっている。
- 2 2 神農像 賛：正法隠老龍宣寿 画家不詳
医薬の祖神。
山野の草をなめ一日百死百生の人体実験を自ら繰り返し薬草を発見したと伝えられる。
- 2 3 井上玄徹像 賛：井上玄徹 天和 2 年 (1682)
井上玄徹 (1602-86) 江戸前期の名医。幕府の医官。周防山口の人で、慶安 3 年 (1650) 将軍家光の侍医となり、将軍・大名の診察を行った。また、延宝 5 年 (1677) 京都にて東福門院の病を治し、その後法印に叙せられ、交泰院の号を受ける。門人多数。
- 2 4 金匱要略(キンキョウリョク) 張仲景 著 (天明 8 年 (1788 年刊))
「傷寒論」とならび後漢の名医、張仲景の治療法を伝える古典として尊重され「金匱要略」には糖尿病、肥満症をはじめ生活習慣に基づいた疾患、婦人科疾患など「傷寒論」にはない多くの疾患が記載されている。
- 2 5 済生備考 杉田成卿 纂述 (嘉永 3 年 (1861 年刊))
ガス麻酔法、聴診器を日本に紹介した最初の刊本
- 2 6 済生三方 フーフランド 著 ハーマゲン(蘭) 訳 杉田成卿 訳 (文久元年 (1861))
“Enchiridion Medicine” の巻末に載る刺絡・阿片・吐薬の三方を杉田玄白の孫である杉田成卿が訳したもの
- 2 7 張仲景像 賛：荻野元凱(オギノゲンカイ) 画竹堂福惟
漢方医の祖、「傷寒論」の著者として知られるが、中国の正史がその伝記を残していない。
- 2 8 医心方 巻第 16 (安政年間刊(復刻版))
984 年丹波康頼撰。全 30 巻からなる。中国・韓国の医書百数十部を参考にした平安時代の医書で、現存日本最古の医書。参考にした原書の多くが失われたり、その後改修されたりした為、医学史上の価値は高い。
- 2 9 丹波康頼像 賛：小川鼎三
丹波康頼 (912-995) 丹波の人。漢の霊帝の子孫にあたり、「医心方」の編著者で、この仕事で丹波宿彌の姓を受ける。享年 84。
- 3 0 病学通論 緒方章(洪庵) 訳述 (安政 6 年 (1859 年刊))
病理学を体系化し紹介せんとした総論書で、当時広く読まれた名著として知られている。
- 3 1 華岡青洲像 賛：華岡興
華岡青洲 (1760-1835) 世界で初めて全身麻酔薬による乳癌摘出術に成功し、近世外科の開拓者として知られる。
- 3 2 金創口授
花岡青洲 口授 山崎末香 筆記
金創(刀等金属で出来た傷)の治療に当り、対応の心がけと、身体各部位の金創を治療する上での医師としての心がまえと、薬物調合上の注意事項をくわしく述べたものを筆記したものである。

- 3 3 一本堂薬選 香川修庵（修庵）（享保 16 年(1731 年刊)）
 実際行った実験により修庵が認めた多くの薬物その他の効能や、薬物の鑑別などを集積したものである
- 3 4 香川修庵 雲想衣裳花想容云々 七絶三行
 香川修庵(1683-1755) 播磨姫路の人。京都に住む。伊藤仁斎に儒学を学び、後藤艮山に医学を学ぶ。儒学と医学は一本であるといつて一本堂を号とする。 宝暦 5 年 2 月 13 日歿。享年 73 歳
- 3 5 緒方洪庵像（模写） 賛：緒方章（洪庵）
 緒方洪庵（1810-1863） 備中足守藩の人。大阪に適々斎塾を開き多くの塾生を育成した。文久 2 年に幕府医学所の頭取に命じられ、賛はこの時の心境を詠んだもの。
- 3 6 新井白石・貝原益軒・杉田玄白三哲像 賛：杉亮二
 明治 25 年 3 月 4 日医学者有志が集まり先哲を祭った時に作成したもの。賛：杉亮二は統計学の先駆者。この年の先哲祭は翌年から医家先哲祭となり、後年日本医史学会へと続く。
- 3 7 西洋紀聞 新井白石（明治 15 年(1882 年刊)）
 新井白石が書いた西洋の研究書。自ら切支丹屋敷へ赴き、キリスト教布教のために来日したイタリア人宣教師ジョバンニ・シドッチを審問した白石がその内容をまとめたもの。
- 3 8 腹證奇覽(フクショウキラン) 稲葉文礼(イハフミノ)（寛政 11 年・1799 年刊）
 腹診の書。本書では腹部の症状を図説しており、腹診の習得を容易にさせた。図の中の青く彩色された所に症状が現れることを示し、この症状がある時に用いる薬を絵の右片に記す。
- 3 9 瘍科秘録(ヨウカヒロク) 本間玄調(ホンマゲンチョウ)（弘化 4 年・1847 年刊）
 華岡青洲に学び華岡流外科の大成者とされる。瘍科（外科）を扱う本書では乳がん（乳岩）の治療は切除を第一とした手術法が記されている。華岡流の麻酔薬「麻沸湯」を使った麻酔術法や腋のリンパ節転移には再発策として摘出すべきことなども論じられている。
- 4 0 続・瘍科秘録（本間玄調(ゲンチョウ)口述）（安政 6 年・1859 年刊）
 正編，続編ともに多数の図が示されており，続編の脱疽手術例は有名な話である。華岡青洲，シーボルト等に師事。本邦初の下肢切断手術を脱疽患者に行っている。
- 4 1 病草子（模写）
 関戸本と呼ばれる 12 世紀後半の各種の奇病や身体の異常に関する短い記述や説話を集めている。画は常盤源二光長の系統の世俗絵を得意とした何人かの宮廷画家によるものだという説がある。詩書は刑部大輔吉光の作をト部兼好が写したものであるという説が伝えられている。
- 4 2 風俗三十二相 灸治 画：芳年
 江戸時代に陰暦の 2 月 2 日に灸をすえると特に効能が著しいとか、一年中無病息災といわれ、この日に灸を据える風習が人々の間に広まっていた。灸は東洋医学においては、鍼と共に治療の要術で、鍼・灸・薬の三つを併せて行うのが名医とされていた。ハワイ大学から寄贈されたもの。
- 4 3 きたいな名医難病療治 画：国芳
 一勇斎国芳(1797-1864)は不勇者絵の第一人者。きたいな（奇態な）名医とは、この時代には珍しい女医で奇想天外な名医のこと。弟子の医師があばた、鼻なし、近眼ろくろ首、虫歯、かんしゃく、一寸法師、風邪男などを治療している。この絵は幕府や公家を風刺していたため発売禁止処分となった。ハワイ大学から寄贈されたもの。

4 4 麻疹まじないの辨 画：芳豊 文久 2 年

禅家の僧、鉄牛和尚は元々勇ましい武士であったが、諸国を修行中、飛騨で道に迷い、麻疹神に会い退治したという話がある。以後、「立春大吉鉄牛和尚」と書いて門に張っておくと麻疹は家に入ってこないという。ハワイ大学から寄贈されたもの

4 5 フーフェランド述 緒方洪庵 抄訳 扶氏医戒の略 安政 4 年(1857)

フーフェランドの著書“Enchiridion Medicum”(1836 刊)の巻末の医戒を緒方洪庵が抄訳し、12 章にまとめたもの。洪庵の塾にかかげられ、指導の指針となった。

4 6 父母の恩をしる図

三枚一組の最初一番右側は男・女の関係について古くからの言い伝えを記し、二番目中央部は男・女間の性生活を中心に述べ、三番目左側は女性の胎内で出産に至るまでの胎児の発育を述べている。この頃の性教育的要素をもつ。ハワイ大学から寄贈されたもの。

4 7 麻疹禁忌 画：一鵬齋芳藤 文久 2 年

文久 2 年に描かれたもの。唐の開元年中、終南山の進士・鍾馗が病中の玄宗皇帝の夢の中に現れ、魔を払い病を癒したという故事から防疫神となったのに題をとって画面左に鍾馗を配し、中央に葉祖神の神農像の掛軸の絵を配し、その前に供えられているのは百合、かんぴょう、ぜんまいなど「食べて宜しきもの」等病に対する万全の処置を示している。強力な武神の力を借りて疫病を重複追放することを願う庶民の心情が窺われる。ハワイ大学から寄贈されたもの

4 8 藏志 山脇東洋 (宝暦 9 年・1759 年刊)

宝暦 4 年(1754) 2 月 7 日、山脇東洋らが官許を得て京都の西郊で日本で最初の人体解剖を行ったときの記録と東洋の随筆。このとき解剖された男屍(38 歳)は刑屍にも拘わらず厚く葬られたことが本書中の「祭夢學文」に述べてある。

4 9 解体新書 kulmus(キュルムス), JA 原著 杉田玄白 訳 (安永 3 年・1774 年刊)

明和 8 年(1771)3 月 4 日に杉田玄白、前野良沢、中川順庵らが千住骨ヶ原での解屍を見学その時持参した西洋解剖図譜(ターヘルアナトミア)が正確なのに驚嘆して、同書の翻訳に着手した。原著は J. A. kulmus (ドイツ人)でそれを G. Dichten が蘭訳したものを用了。これは日本における最初の本格的な蘭書の翻訳書であり、蘭学興隆のきっかけを与えた。

5 0 蘭学階梯(ランガクカイイ) 大槻玄沢(オツキケンソク) (天明 8 年・1788 年刊)

蘭学入門の手引きと蘭学興隆(コリュウ)が記されている。この本の出版により蘭学が広まる。本格的蘭学研究の育成のための教科書の一つ 杉田玄白の門下生

5 1 婦人内景並胞衣之図

寛政 12 年(1800)4 月、大阪で 37 歳の刑屍を解剖した時の絵巻。解剖者は整骨医で蘭学者の大矢尚斎(孝靖)ら。腎臓などに色素液を入れ、それが膀胱に至るのを実験、観察している。後年の写本を含めても数点が現存するだけの貴重資料

5 2 平次郎解剖図

天明 3 年(1783)伏見で行われた解剖のとき作られた解剖絵巻。解屍された者が平次郎(40 歳)という盗賊であったことから平次郎解剖図と呼ばれる。

この時の解剖の主宰者は橘南谿(タチバナケイ)、指導にあたったのが小石元俊であった。